

エマソンの『自然論』——視る姿勢と その意味をめぐって

福 田 京 一

In the woods too, a man cast off his years, as the snake his slough, and at what period soever of life, is always a child. In the woods is perpetual youth. Within these plantations of God, a decorum and sanctity reign, a perennial festival is dressed, and the guest sees not how he should tire of them in thousands years. In the woods, we return to reason and faith. There I feel that nothing can befall me in life—no disgrace, no calamity (leaving me my eyes), which nature cannot repair. Standing on the bare ground—my head bathed by the blithe air, and uplifted into infinite space—all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.

I.—Nature, ¹*Nature*

新しく世界を視なおすことを要請された1830年代のアメリカの思想的文化的風土を理解するため、エマソンを巨視的視野のもとに捕える試みとして1836年以前の彼の思想行動両面の整理であり、それ以降の出発点ともなった『自然論』をとりあげて彼の視る姿勢とその意味について考えてみたい。

まず自然科学の問題から入っていくのが適切かと思う。学生時代より自然科学に強い関心を寄せていたが、彼の関心の持ち方は天文学や博物学などそれ自体にあったのではなく、自然の観察の結果導き出された法則のもつ普遍性、完全性が自然と人間の関係における真理に何らかのヒントやア

ナロジエを提供してくれるからであった。1832年の講演「天文学」で「自然の研究者は自然法則の単純性と完全性を捨てて神の性格を学ぶべく教会や大学に行ったとき、彼らはそこで自然の根拠に関する彼ら自身の結論と対立するような粗雑で価値のない神概念を見付けて、鶴の一声によってとでも言ってよいほどに、彼らの（自然科学者としての＝筆者註）信念を捨て去ったのでした。」² エマソンが批判している科学者とは違い、彼は科学が自然現象の多様性と複雑性から単純性と完全性を備えた法則を演繹することに注目した。しかし彼にとって法則の必然性が重要であったのではなく、自由の領域が開かれる自然と人間の道徳的関係が問題であった。キリストもスウェーデンボルグも奴隷解放運動者も「全力をもって自然に働きかけた実例」であり「理性が王笏を一瞬握った例」（8章）であるという。では実際にエマソンは自然をどのように視たのか。

「序」の冒頭でまず彼の時代を反省したあと、「太陽は今日も輝いている」と述べているように普段目にする自然の事実から出発する。この事実によって、一個の人間が太陽に向うとき、この相對峙する関係には何ら歴史性が介入しないことを読者に納得させようとする。この武装解除令のあと、「新しい土地、新しい人間、新しい思想」が生れ存在すると述べる。

1章の冒頭で、星を視るように言っているのも同じ主旨である。Understanding と Reason という認識能力に従えば、この自然を視る眼は前者に属する。ここでこの太陽なり星を視るという最初の経験が次の段階の認識に発展するための条件をいくつか彼が差出していることに注意しなければならない。それは、人から離れてひとりで見ること、子供の眼で視ること、森で視ること、である。このような条件であれば人間は理性と信仰に戻って、「あらゆる卑しい利己心は消えて、私は透明な眼球になり、無であり、全てを視る」ことができるという。この部分は様々に解釈されているが、³ その意味するものについては後にまわす。ともかく彼のこの視方はこのエッセー全体を貫いている。つまりある条件のもとで自然を視れば、

感覚の眼に映るもの、Understanding の対象になるものは透明になる。そして自然そのものが消えたその時が‘the real higher law’が見えてくる啓示の瞬間というわけだ。この見えないものへのまなざしあるいは想像力の有り様を問題にしよう。（われわれはエマソンに認識の限界についてのカント哲学を期待してはならない。）エマソンは世界の根源を見つけるために役立つものとして「自然」「物質」「美」「言語」「訓育」「アイデアリズム」をあげて、この第2段階の視る瞬間への道を『自然論』の第7章までに準備しているのである。そして眼に見えないものを視た眼で再び自然や人間の事象を視ると初めて世界が新しく見えてきて、理解されるという。今これを第3段階目のヴィジョンと呼んでおく。

エマソンの視る姿勢には、感覚の眼で視ることから理性 Reason や精神 Mind の眼で視ること、そしてその眼でもって再び世界を視ること、というように3段階が認められる。このような単純化、図式化に疑問をもつむぎには、エマソン自身が「序」で「ここで取扱うような一般的な問題においては、用語の不正確さは些細なことで、思考の混乱は起きないだろう」といっていることから彼の意図の明快さは了解されよう。この点を閉却すると、ヒンズー教やスーデンボルグの影響とか、神秘主義的要素が強いとかという方向に逸れるのではないかと思う。これらは別のコンテクストで考えられるべきで今は触れない。とにかく『自然論』では第1段階から第2段階の視る姿勢に移る必要性とその必然性を唱き、何度も彼は啓示の瞬間に固執する。

冒頭の引用文に、森の中では時間感覚は消え、子供ないし青年に戻り、頭は無限の空間の中に高められ、そして利己心は消えて、肉体と精神を備えていた存在は「透明な眼球になる」とある。その意味するところは、精神そのものになるということである。「私は無である」ということは感覚の支配を脱して重みも形もない存在に還元された意で、やはりこれも、私は精神そのものである、という意味で、そしてこの私が「全てを視る」と

いうことになる。つまり精神が全てを視る、ということになる。そしてこの精神は神の一部でもある。精神という語は彼の用語法のつねとして Reason とか Spirit とか Soul とか Idea とかに置換可能である。1834年弟エドワード宛の手紙で次のように語っている。「Reason は Soul の最高の能力です——そしてわれわれがしばしば Soul という語それ自身によって意味しているものなのです。それは決して推論するものではありませんし、証明したりするものではありません。それはただ知覚するものです。それはヴィジョン⁴です。」このように精神あるいは Soul あるいは Reason がヴィジョンであるならば、われわれはエマソンが眼に見えないものにむかって眼をむけるまなざしを追うより方策はない。

ここで精神自体になるエマソンの姿を、そうなる直前の姿に戻してみると次のようになる。四季を通じてその季節に応じた装をしている静かな森にいる一人の子供の姿が浮ぶ。彼は何事にも捕われることない素朴な性質の子供で、彼は自然が償うことのできない不名誉や災いなど身にふりかかることなど思ってもみない。この「子供は実際、外界の世界の存在を信じている。それがただ外観にしかすぎないという信念は後になって得られたものであるが、文化を知ることによってこの外界への信念は最初と同じように確実に精神のなかに湧きあがってくるだろう。」(6章) 子供の眼が第2段階の視る眼と同じものだと言おうとしているのがわかる。さらに8章ではオールコットの文を引用して「人々が無垢であるとき、人生はより長く、われわれが夢から醒める時のように静かに不死なるもののなかに入っていくだろう、(中略) 幼年期は永遠の救い主で墮落した人々の腕のなかにやってきて、楽園に帰るようにと彼らに説得するのです」とある。整理して言えば、第1段階から精神の眼で視る第2段階に移る啓示の瞬間とでも呼べる状態とは子供の状態に共通しているということである。さらにいえば、エマソンはこの啓示の瞬間のモデルを感覚による判断である Under-standing に先立つ能力、すなわち本能——または外界への素朴な順応、信

仰と言い換えてもよい——に見出している。ここに世界を新しい眼で視る際にモデルとして原始主義や *simplicity* の概念を使った18世紀の西欧人と同じ精神的気質を認めることはさほど困難でない。本能についてエマソンは『日記』に次のように書いている。「知識より意見が先にあり、意見より本能が先にある。ある行為が友情に叛くとか、不適切であるとか、間違っているとかは本能が教えてくれる。われわれは美事に保護されているのだ。」(3月23日)「私は本能を信じるつもりです。というのは理性はいつも本能の後に立ち止まっているから。(中略)『われわれの第1番目と第3番目の考えは一致する。』」(5月21日)(彼が第1番目と云っているものは本能を指し、第3番目とは理性のことで、私のいう第2段階の視ることにあたる。)『自然論』より例を今ひとつ拾えば、4章で眼に見えるものと人間の関係を説明したあと、「必要なものだけを持っている野蠻人は比喩で語る。歴史を遡れば、言語はより絵画的になり、言語の幼年時代ではすべて詩であった。あるいはすべての靈的な事実は自然の象徴によって表わされる。(中略)これが最初の言語であり最終の言語である」(傍点筆者)と。

原始主義や *simplicity* の概念は18世紀の西欧に目を移すとき単純なものではないが、エマソンに限っていえば、精神や理性という眼球に彼自身になって世界を新しく視る際の一種のレンズである。このモデルを想定させた現実的な理由は数々考えられよう。アメリカが国家としてまだ幼年期にあったことも、目の前に文明化されておらない荒野が広がっていたことも、さらに彼自身の内面の荒野、苦い体験、数々のエマソン家の不幸から自己を解放するために自己と世界の関係を再構成する意志も強く働いていただろう。自然は「つねに(その人の) *spirit* の色合いをもつ」のだから伝統や不運を背負った人間の病める精神の投影としての世界が消えて‘*the real higher law*’を透視できる眼を欲し、自己と世界を新しく見直したかったのだとも説明できよう。だからこの法則は自然科学のもつ単純で、完全な必然性——この必然性は自由と対立するものではなく、そこにおいて

初めて自由が可能となるようなもの——を必要とするし、従って単純な性質、本能しかもたない原始人や子供の状態とよく似た状態でのみ視えてくるものと彼が考えることも理解できよう。

しかしモデルはつねに理想の相貌をもつが普遍的なものではなく、個別的なものである。本能と‘the real higher law’を視る精神には異質などころがあるように思われるかもしれない。確かに彼は、ルソーと同じく、無垢 *innocence* の状態に戻ればよいとは言わない。「無垢」という語の使い方をみると8章で「父親の伝統にならって神を崇拝する無垢な人々がいるが、彼らの義務感⁷は未だ彼らの能力すべてを使用するまでに至っていない」（傍点筆者）とも、現在の人間の「精神は粗野で‘imbruted,’彼は利己的な野蛮人である」ともいっているように、理性の眼をもつには原始人や子供の状態に帰れば事足りるのではなく、「信仰ある考える人’*a faithful thinker*’でなければならないという。この「信仰ある考える人」の考えることとは第1段階の能力のことではないのは明白で、子供固有のもの⁷と異なった道徳的宗教的な色彩を帯びた意味がこめられている。ここで道徳感覚 *Moral Sense* と呼ばれる要素を考えねばならなくなる。

スコットランドの道徳哲学なかでもデュガルド・スチュワートの哲学はエマソンが学生時代に読んで以来彼の思想発展上の基調となったものであ⁷る。それによれば道徳感情は子供がもの心つくよりも以前から存在する精神の普遍的原理で、単なる分別の容器ではない。道徳法則は「精神 *Mind* と時空を共にする法則」であり、「精神の本質」でもある（『日記』1822年11月16日）。そしてここに「もしわれわれが原始的な健康を取り戻せば、本能が命令を下し、理性が王子の先唱者として喜んで仕えるだろう、とサンブソン・リードは考えている」（『日記』1834年11月16日）という文を並べると明らかになることは、精神の本質である道徳法則を教えてくれるものは原始的な健康状態にある本能であるということだ。しかし「自然の絶対的存在への一種の本能的信仰は感覚と再生前の悟性に属する」（6章）

とあるように、本能は第1段階の視る眼に留まることがある。だから精神または理性の眼が開かれなければならぬという。こうしてエマソンにおける原始主義は第1段階から第2段階への視る姿勢に移る際にモデルとして作用し、そしてこれによって初めてその本質が道德感覚である精神の法則を視る眼が措定されるのである。だからもし自然や人間の行為を新しく視る眼が曇れば、すなわち「だからあなた自身の世界を建設せよ」（8章）というテーゼが実現できない場合、再びこの視る型をはじめの段階から繰り返さねばならないことになる。エマソンの進歩観の基礎もここにあり、この型に沿った精神の円環運動を反覆しながら自己をつまみ精神 Mind や理性 Reason や道德 Moral を実現していく過程のことである。この過程のなかで文化や教養は精神に活気を与える便宜であるばかりでなく、信念を確信させる証拠ともなる。

まなざしへの彼の執着は想像力の過重に伴う知的努力の軽減、知的緊張の弛緩をもたらす。原始主義と simplicity の概念を利用することにそれは認められよう。あるいはペリー・ミラーにならって、エドワーズからエマソンに至る piety の流れを17世紀のピューリタンの二重の遺産から流れでた一方の伝統として理解することも可能であろう⁸。確かにエマソンは、1830年代になると敬蒙主義やユニテリアンの合理主義的理性を拒絶して、本来見えないものを自己の内部と自然のなかに視たいと願う魂の渴望を露呈し、元来ピューリタンが孕んでいた危険、神秘主義と汎神論への傾斜を示している。しかしわれわれが『自然論』を読むとき、論理と感情の奇妙な混淆に当惑する。論理の側からみれば、中世の神学、ピューリタンの神学、ユニテリアニズム、そして『自然論』と並べれば、知的努力の単純化への傾向は明瞭である。この単純化の根底には18世紀的な普遍なるものとしての自然と自然法 の概念と 道德哲学の影響が流れており、エマソンの1820年代から1830年代への変容は、断絶や拒絶という形ではなく、連続した展開なのであり、それは新古典主義からロマンチズムが生まれでてくる

のと同様のものである。そしてこの論理の単純性と人間と人間を越えた存在の間にある感覚の障害を去除して世界と自己を視ようとする意志のもつ情緒的単一性の混合がこのエッセーのもつ力強い平衡感覚なのである。これは、世界すなわち自己が決して逆説ではない形で視えたと信じえた者の自信の強さを物語っている。

しかしピューリタンには見えない神がいつも彼らを見下ろしているという強迫観念があり、だからこそ論理によって隠れた神へ肉迫しようとする一層努力したが、18世紀から19世紀に至る知的緊張の後退とともに視られているという意識が薄れて、エマソンに至って視ることが単なる視点ではなく——つまり人間の精神がとるひとつの視点ではなく——精神や理性そのものになった。この点で眼は精神の機能である「靈感の全段階の象徴」であり、「透明な眼球」は「エクスタシーの瞬間」の隠喩であるといった S. ポウルの見解は適切である。しかし瞬間的なエクスタシーから醒めた理性の残された時間は生きることに費されねばならなかったように、1836年以後超越主義が世界観としてアメリカにおいて優勢であった期間は極めて短かかったが、世界を新しい眼で見直そうとする当時のアメリカの精神的風土と社会的特異性のために大きな浸透力と反響を持ちえた。エマソンにおける視られるという視点の欠如はしばらくしてホーソンやメルヴィルによって埋め合せられる。視るだけで行動しなかったカヴァーデール批判。フーパー牧師のヴェールが象徴する視ると視られるの両義性。インシュメルに視られていたエイハブ船長。いやそれどころか、「あなたは消えようとする輝やく瞳ではるか遠く永遠の方を見ておられる。では何を見ておられるのかおっしゃって下さい」と詰問されたディムズデルも、白鯨のみを追跡するエイハブも実はエマソンがモデルであったのだと想像しても少しも不合理ではない。

エマソンにとって『自然論』は大学時代より33歳迄の思想と行動の整理として、またそれ以後の出発点として彼が辿る運命に対して先ず視るのだ

という立場の宣言書であり、意義づけであった。そして視るだけではなく、また説教者として聞かせるだけでなく、自ら聞き、触れ、臭ぎ、味わうべき現実の世界が用意されていたが実際にその世界を生きたのは師のもとから巣立ったソローやホイットマンであった。1844年エマソンは「もう7年前の見習い小僧ではない」といい、懐疑と信念の間を揺れ動く錯乱に耐えながらも「思想の世界を現実化」しようとする幻視者の孤独に「真のロマンス」を賭けていた（「経験」¹⁰）。1860年の『処世の道』の一篇「運命」においても彼の主旋律は変わっていない。

注

- 1 テキストは *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Centenary Edition に依る。以下は筆者の拙訳。
- 2 “Astronomy,” *Young Emerson Speaks*, ed., A. C. McGiffert, Jr. (Washington: Kennikat Press, 1968), p. 175.
- 3 Christopher P. Cranch の有名な戯画とそれを支持する Jonathan Bishop はこの部分は “a coarse parody of the watchful casualness of the other sentence” (*Emerson on the Soul* p. 15) であるといっている。Henry A. Baun は ‘evidence of insanity,’ (“Hegel and His New England Echo,” *The Catholic World*, XLI, 59-60) とも言っている。なお「眼球」のイメージを超越主義者の「愚かしさ」の表われとして批判している批評家の例は Sherman Paul, *Emerson's Angle of Vision* (Cambridge: Harvard University Press, 1952) の Notes pp. 244-245. を参照されたい。
- 4 Ralph. L. Rusk (ed.), *The Letters of Ralph Waldo Emerson* (New York: Columbia University Press, 1939), I, 412-413.
- 5 『日記』は W. H. Gilman と A. R. Ferguson の編集による *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* (Cambridge: Harvard University Press) に依る。
- 6 この方面については、C. B. Tinker の *Nature's Simple Plan* (New York: Gordian Press, 1922), L. Whitney の *Primitivism and the Idea of Progress* (New York: The Johns Hopkins Press, 1934), A. O. Lovejoy と G. Boas の *Primitivism and Related Ideas in Antiquity* (New York: The Johns Hopkins Press, 1935), R. O. Havens の “Simplicity, Changing Concept,”

Journal of the History of Ideas, XIV (January, 1953), 3-32. など大部なものが多くある。

7 M. R. Davis, "Emerson's 'Reason' and the Scottish Philosophers," *New England Quarterly* (1944), 209-228. を参照。

8 P. Miller, *Errand into the Wilderness* (Harper Torchbooks), pp. 184-203. を参照。

9 *Emerson's Angle of Vision*, p. 72. この研究書の第3章はエマソンの視る意味を構造、機能の面から分析した最良のものである。

10 "Experience," *Complete Works*, p. 86.